

日本語における外来語アクセント型の 地域方言の差*

李 香 蘭**

目 次

- 1.はじめに
 2. 研究対象と研究方法
 3. 外来語アクセントの原則
 4. 東京・京都・大阪アクセントの体系と特徴
 - 4.1 東京・京都アクセントの体系
 - 4.2 東京・大阪アクセントの体系
 - 4.3 東京・京都・大阪アクセントの特徴
 5. 分析結果
 - 5.1 2拍語
 - 5.2 3拍語
 - 5.3 4拍語
 - 5.4 5拍語
 - 5.5 6拍語
 6. おわりに
-
-

1.はじめに

日本語における外来語のアクセントはどのくらい地域方言の差があるのか。つねに疑問を抱いているのは、外来語アクセントには後ろから3拍目にアクセントが来るという大原則や原語があり、その原語のアクセントをある程度忠実に移しとっている(柴田1994, 李1995)ため、和語や漢語などに比べてアクセントの方言差が少ないと予想されるからである。

杉藤(1986b)で、大阪アクセントは特殊拍にアクセントを置く傾向を除けば、外来語は共

* 이 논문은 2005년도 圓光大學校 교내 연구비 지원에 의해 研究되었음.

** 圓光大學校 사범대 일어교육과 教授, 日本語音聲教育·音韻論 專攻.

通化に進んでいると述べている。それから中井(1988)でも京都アクセントの若年層における共通化は顕著であるが、外来語の場合は老若のアクセントの差があまりなく、共通語のアクセントの影響はかなり大きいことを示唆している。それから拙稿(2001)で東京・大阪アクセントを検討し、拙稿(2002)では東京・大阪の外来語アクセントを対応して検討してみた。ところが、同一の語でも東京・京都アクセントは一致していても大阪アクセントとは異なる場合もあれば、その逆の場合もある。それからそれぞれ共通している語数の差があるので、正確に比較して検討できなかった。

そこで、今回は実際外来語にはどのくらい方言差が見られるかを調べるため、東京語アクセント体系とはかなり異なっている京阪式アクセントである京都や大阪のアクセントを東京アクセントとの対応の観点から分析してみることにした。特に東京・京都・大阪アクセントが一致しない例を中心にその要因と原因を検討してみる。

2. 研究対象と研究方法

本稿では単純語の外来語のみ論究の対象とし、単語レベルでアクセント型をすべて分析し、助詞のつく場合は考慮しない。表記はNHK編(1998年版)に従う。東京語についてはアクセント核を前の拍から数える方法、例えば◎,①,②,③…などで表記する。京都アクセントは「下がりめ」の有無とその位置によって◎ ① ② ③ 1:3 1:4 ……で示してあるが、ここでは便宜上 ◎→コ◎ ①→テ◎ ②→① ③→コ② 1:3→テ② 1:4→テ③などに示す。なお、大阪アクセントと同じように京都アクセントにも高起式(以下コと示す)と低起式(以下テと示す)を参考に示す。

大阪アクセントは核の有無・位置、そして高起式(以下「コ」と示す)か低起式(以下「テ」と示す)かも同時に表す。しかし、コ・テ式は共通語にはないので東京・京都・大阪アクセントを対応させて比較するには難しい。そこで、本稿ではアクセント核の有無と位置による差を検討することにする。コ・テ式は検討の対象とならないが、参考に示すことにする。

ゆれのある語については『東京アクセントの資料』『大辞林』『全国アクセント辞典』を参考にして優勢の型だけ考慮する。

この際、同じ年代で作られた3つの辞書、東京アクセントはNHK編(1985年版)京都アクセントは平山(1986年)、大阪アクセントは吉原(1983年)を用いる。調査の対象となる語はこの3つの辞書で共通に表記されている外来語の単純語1445語を抜き出して東京アクセント・京都アクセント・大阪アクセント型を拍数別にそれぞれ対応させて検討してみた。特にアクセントが一致しない語についてはその原因がどこにあるのか例を挙げながら分析してみた。

3. 外来語アクセントの原則

外来語アクセントはまったく任意というわけではなく、一般に認められるある程度の規則性が見られる。本稿では複合語は除外したので単純語の原則¹⁾だけ述べることにする。

1) 2拍語・3拍語

原則として頭高型である。ただし、特殊な拍で終わる3拍語には中高型が見られる。

①型: アマ ゼロ ドル バス オイル ガウン キャンプ

②型: ドラマ ドラム トリオ ブラシ プラス

2) 4拍以上の語

原則として終りから3拍目まで高い型(-3型=②)である。ただし、そこに特殊拍がくるときは、原則として前にずれる²⁾。

②型: デザート ポマード アルバイト エンジニア オリンピック

3) 古くはいった語など、日常生活によく使われてすっかり日本語になりきったようなものや和製英語などは平板型になる傾向がある。

⑥型: カレー ピアノ ボタン アイロン オルガン メリヤス アルコール
リモコン エアコン パソコン セクハラ スマホ

4) 新しくはいった語でまだ日本語になりきっていないような語や、外国語に親しい人の発音には、原語に近いアクセントが使われる傾向がある。

アクセント(a'ccent)(①)

ガイダンス(gu'idance)(①)

ターミナル(te'rmin'al)(①)

ティピカル(ty'pical)(①)

4. 東京・京都・大阪アクセントの体系と特徴

4.1 東京・京都アクセントの体系

東京アクセントは第1拍目と2拍目が必ず高低あるいは低高の位置関係に置かれているのに対して京都アクセントは高高・低低で始まる語もあれば高低・低高で始まる語もある。このように東京アクセントより京都アクセントのほうが複雑なアクセントの体系をしていることがわかる。

1) NHK編(1998)『日本語アクセント辞典』所収の、秋永一枝「共通語のアクセント」 pp.186-187参照
例は拙稿(1995)PP.5-6からとった。

2) 例えば エンジン(①) サッカー(①) エレベーター(③) サイクル(①)

	<東京アクセント>	<京都アクセント>
(鼻)	ハナ、ハナが	ハナ、ハナが
(男)	オトコ、オトコが	オトコ、オトコが
(今晚)	コンバン、コンバンが	コンバン、コンバンが
(色紙)	イロガミ、イロガミが	イロガミ、イロガミが

4.2 東京・大阪アクセントの体系

東京語と大阪語のアクセントの型を3拍の名詞について比較してみよう。助詞のついた形をあげると次のようである。濃く示された拍が高く発音するところである。

	<東京アクセント>	<大阪アクセント>
(野原)	ノハラガ ●○○○	ノハラガ ○●○○
(心)	ココロガ ○●○○	ココロガ ●○○○
(鏡)	カガミガ ○●●○	カガミガ ●●●○
(桜)	サクラガ ○●●●	サクラガ ●●●●
(雀)	スズメガ ○●●●	スズメガ ○○○●
(燐寸)	マッチガ ●○○○	マッチガ ○○●○

上の例のように大阪アクセントも東京アクセントに比べて全体の構造がはるかに複雑である。

4.3 東京・京都・大阪アクセントの特徴

東京式のアクセントの地方では撥音・促音・引き音(「一」)・連母音の後部、母音の無声化する拍など、独立性の少ない音韻にアクセント高さの切目、つまりアクセント核がきたとき、それを前にずらす傾向がある。外来語の原則のところでも述べたように例えば、「カンバス→カンバス①」・「シャッター→シャッター①」・「エスカレーター→エスカレーター④」・「タイトル→タイトル①」・「キャプテン→キャプテン①」などがある。

しかし、秋永(1998)³⁾は“近畿地方の大部分、四国のうち高知、愛媛、徳島県および香川県の西半分、九州の西南部、北海道に飛んで新十津川、重内といった京阪式アクセントの地方などでは、音韻がアクセントを動かさない傾向がある。例えば、京都方言では、「コンバン(今晚)②・ブランコ③」「ヘルメット④」「チューがく②・オーライ②」「ヒクイ(低い)①」のような、独立性の少ない音韻にアクセントの高さの切目がきても、アクセントの位置が変化しない。”と述べている。確かに東京アクセントが特殊拍などにアクセント核が置かれられないのに対して京阪式アクセントは特殊拍にもアクセントが置かれる傾向が

3) (1998)秋永一枝「共通語のアクセント」p.218 NHK編(1998年版)所収の付録

あると言えよう。ところが、今回の調査では特殊拍でも特に「促音」にそのような傾向が強く、それ以外の特殊拍は例が極めて少なかった(6拍語以上の語を参照)。これは外来語に限って検討した結果であるからか分からないが、今後特殊拍にアクセントが置かれることについて和語や漢語も含めて調査すべきであろう。

5. 分析結果

NHK編(1985)、平山(1986)、吉原(1983)で共通している単純語の外来語の総数144語を抜き出して東京アクセント(以下「T」とする)・京都アクセント(以下「K」とする)・大阪アクセント(以下「O」とする)のアクセント型をそれぞれ対応させて検討してみる。

5.1 2拍語

総数⁴⁾60語中、①で一致している語⁵⁾は「ゴム、ジャム、ゼロ、ドア、ハム、ベル、メモ」など48例、一致しない12例の内 $T \neq K = O$ ⁶⁾が10語(エロ、デモ、ロケなど)あり、残り2語(ネル、プロ)は $T = K \neq O$ ⁷⁾である。

5.2 3拍語

総数401語中、 $T = K = O$ は287例、一致しない例114語の中で $T = K \neq O$ は11例、 $T \neq K = O$ は78例、 $T = O \neq K$ は22例、残り3例は $T \neq K \neq O$ である。一致する語は $T = K = O$ が「①—①—①」の例が「エース、オペラ、クイズ、ソフト、ナイフ、フィルム」など255例もある。次は一致しない例を中心に検討してみる。

1) $T = K \neq O$

アロハ①(②①⁸⁾)—①—テ② カンナ①—①—コ②①

スリル(thrill)・プラン(plan)①—①—テ②

ドラマ(drama)・ドラム(drum)・トリオ(trio)・ドレス(dress)①—①—テ②①

ピント①—コ①—① ボーイ①(①)—コ①—①(少年)コ①(給仕)

ボレロ①—①—テ②

[計11例]

4) 3つの辞書でT・K・Oが共通に表記されている語の総数。(以下同じ)

5) T・K・Oが全部一致するという意味。以下、 $T = K = O$ と表示する。

6) KとOが一致していてTとは一致しないアクセントを意味。(以下同じ)

7) TとKが一致していてOとは一致しないアクセントを意味。(以下同じ)

8) NHK編(1998年版)に記載されているアクセントの型。(以下()の中のアクセント型は全部1998年版の表記である。

11例中、6語も原語の子音連続の例である。これはT・Kでは子音連続の間に母音を挟んだその拍にアクセントが置かれるが、Oではこの傾向が弱く、テ②が優勢となっている。しかもT=O≠Kではこのような例は1語もなかった。「カンナ」や「ドラマ・ドレス」のOのようにゆれのある型は優勢な型だけ検討の対象とする。

2) T≠K=O

オール・ベルト・メダル①(①①)—①—①

バレエ(運動)・プラグ・ブラシ・メチル①—テ②—テ②

ベニヤ—テ①—テ②—テ①—テ②

[計35例]

♣キャッチ・セット・チェック・チップ・ペット①—コ②—コ②

♣[計44例]

3) T=O≠K(アクセントはT—K—Oの順である。以下同じ)

チェーン・マント・モヘア①—コ①—①

ニグロ・バレエ(舞踊)・ポリス①—テ②—①

ラジオ①(①①)—テ②—①—テ②

[計22例]

4) T≠K≠O

アプレ①(①①)—テ①—テ②

リレー①(①①,①)—テ①—テ②①

[計2例]

このように一致しないアクセントの中では、T≠K=Oのパターンつまり京都・大阪アクセントが一致する形が一番多く、114例中79例もある。これは♣印の例(①—コ②—コ②)のように東京語では「促音」にアクセント核をおけない原則があるのに対して京都・大阪では「ツ」にもアクセントが置かれる傾向があるからである。杉藤(1986)・金水(1999a)⁹⁾でも指摘しているように特殊拍にアクセントが置かれるのは近畿地方のアクセントの特徴の一つとして挙げられる。これは年齢差があり、高年者によくみられ、若年者はアクセントが先行拍にずれる傾向があると述べている。今回の調査の結果では外来語も例外なく、このような傾向に準じると言えよう。

T=K≠O(11例)はT=O≠K(22例)の半分にすぎない。これは京都アクセントより大阪のほうが東京アクセントと似ている例が多いということである。この傾向は4拍語でも同じ倍率で現れる。T—K—Oが完全に一致しない語は3拍語では2例しかない。

9) 金水敏(1999a)「大阪方言の特殊拍アクセントについて」『大阪・東京アクセント音声辞典CD-ROMによる』音声文法研究会(編)『文法と音声Ⅱ』くろしお出版, pp.73-199

5.3 4拍語

総数465語中、一致するアクセントつまりT=K=Oは311で、一致しない語は154例がある。154例の中でT=K≠Oは20例、T≠K=Oは80例、T=O≠Kは44例、T≠K≠Oは10例がみられた。

1)T=K=O (*はアクセントのゆれのある例を表わす)

アンテナ・オムレツ・カステラ・トンネル・バリカン①—コ①—コ①	[計53例]
インフレ・マスコミ・*アトリエ・*アマチュア①—テ①—テ①	[計17例]
エンジン・オーダー・ナプキン・*タイトル・チャンネル①—①—①	[計148例]
アパート・スカウト・ドライブ・*イメージ・*ビタミン②—テ②—テ②	[計89例]
その他	[計4例]

一致する例の中で①が一番多く現れるのは、外来語の原則では後ろから3拍目にアクセントが置かれるべきだが、その拍に特殊拍(主に「ン」「一」)や語末に「一」「ス」「ン」「ル」などのアクセント核を前にずらす音韻的な要因がきて②が①になったからである。語末の「一」「ス」「ン」「ル」などは京都・大阪アクセントでもアクセント核を前にずらす要因としてはたらいっていると言えよう。

2)T=K≠O

カリエス①—①—テ②	
スリラー①—①—テ②①	
ハードル・フィールド①—コ①—①コ①	[計20例]

このパターンは一致しない例の中で比較的少ないが、語末の「ス」「一」「ル」アクセント核を前にずらす要因が含まれている例が目立つ。

3)T≠K=O

イースト・サンダル・ペーパー①①—①—①	
バーテン・ハンドル・☆フィルター①—①—①	
スケート・ツイード①②—テ②—テ②	
バランス①—テ②—テ②	[計45例]
♣ウエット・フラッシュ・ブロック②—テ③—テ③(○●●○)	
♣キャッチャー・シャッター・ピッチャー①—コ②—コ②	
♣バックル①①(☆①①)—コ②—コ②	♣[計35例]

4拍語でも一致しない例の中でこのパターンの語が一番多く、154例の中80例もみられた。京都・大阪は一致して東京アクセントとは異なる理由は前にも述べたようにTの特殊拍にはアクセント核を置けないが、K・O方言アクセントでは特殊拍にもアクセントを置く傾向があるからである。一致しない理由のもう一つは4拍語の東京アクセントは平板型や平板化に進んでいる例が多いからである。

☆印の「フィルター」のTはNHK編(1985年版)には①②の順、『大辞林』には②①の順になっていたが、「東京語アクセントの資料(1985)」では②が18/19¹⁰⁾、①は1/19で1名しか発音していない。そこで平板型(②)のグループに入れた。「バックル」の☆印の②①は②が17/19、①が2/19となっていたので②を優勢な型としたほうがよいであろう。

4) T=O≠K(アクセントはT—K—Oの順)

アルバム②(②①)—①—②①

トランプ②—テ②—テ②

ニュアンス①—テ②—①

オミット・スコープ・ブリッジ②—テ③—テ②

[計44例]

T=O≠Kでは44例中29語が「ッ」の影響によるものである。前述したように、大阪アクセントも「ッ」にアクセント置く傾向はあるが、京都アクセントのほうが例のように「ッ」にアクセント置く傾向が強いのがわかる。拙稿(2001・2002)でも大阪方言では「ッ」が含まれている語が364語中232例(63.7%)、京都方言では243語中218例(89.7%)が「ッ」にアクセントが置かれていることが調査され、京都方言のほうがこういう傾向が強いことがわかった。

5) T≠K≠O

このパターンの例は「アリバイ・スリッパ・ソケット・ライオン」など10語しかみられず、こういう例の特徴はTの平板型や促音が含まれていることである。こういうのがアクセントを異なる要因としてはたらいっている。

5.4 5拍語

総数290語中、T=K=Oは179例、一致しない例111語中、T=K≠Oは10例、T≠K=Oは63例、T=O≠K33例、T≠K≠Oは5例がみられた。

1) T=K=O

[③—③—③]

10) これは19名のうち18名が平板型で発音していた意味。(以下同じ)

アルバイト・オートバイ・パスポート・ピアニスト③—コ③—コ③	[53例]
アンコール・バリゲート・プロポーズ・プロローグ③—コ③—テ③	[4例]
アンダンテ・エボナイト・グロテスク・バレリーナ③—テ③—テ③	[13例]
アセテート・エゴイスト・マゾイズム・モンスーン③—テ③—コ③	[13例]
アーモンド・アドバイス・アンパイアなどゆれのある語	[8例]
	[計112例]

[②—②—②]

コレクション・スキャンダル・バラエティー②—テ②—テ②	[25例]
* マネージャー・レジスター②①—テ②—テ②	[7例]
	[計32例]

[①—①—①]

アクセント・シングルス・シンフォニー・ナンセンス①—①—①	[22例]
* エチケット・シルエット・テクニク①③—①—①	[5例]
	[計27例]

[①—①—①]

アルコール・グラウンド・バイオリン①—コ①—コ①	[計8例]
--------------------------	-------

一致する(T=K=O)アクセント179例を分類してみたが、外来語アクセントの原則に当てはまる③が一番多く、ゆれのある語を含めれば、112例もなる。次は②で後ろから3拍目に特殊拍が来て③が②となっただけで、これらの語も原則に当てはまる型と言えよう。

* 印の「マネージャーmáanager, レジスターrégister」の①は優勢な型ではないが、原語に多い第1音節の影響も考えられるし、原語アクセントとも一致している。* 「エチケットétiquette, テクニクtechnic」の①もこのような例に含まれる。①となっている語にはこの他にも「～ント」「～ングing」で終わる語¹¹⁾やアクセント核を前にずらす音韻的な要因が含まれているものがある。

2) T=K≠O

カウンター①—コ①—コ②	カンニング①—コ①—コ③	
デリケート(délicate)③①(③)—コ③—①コ③		
ハーモニー・バタフライ(bútterfly)①—①—★コ②		[計10例]

10例中「カウンター・カンニング」のような4語はTKが①でOのアクセントと異なっている。「デリケート・バタフライ」は原語アクセントの意識の有無でアクセントが異なっていると

11) これに属する例は「アクセント・ペーセント・チャーミング・ボクシング」などがある。

考えよう。①が原語アクセントの影響による型である。

3) T ≠ K = O

アーケード・ユニホーム(úniform)①③—コ③—コ③

エピソード(épisode)①③—コ③—コ③①

コンパクト(cómpact)①③—テ③—テ③

スケジュール(schédule)②③—コ③—コ③

[計31例]

♣カトリック・バスケット③—コ④—コ④

♣シガレット・ヘルメット(hélmét)・マーケット(márket)①③—コ④—コ④

♣[計32例]

K・O方言では「ッ」の入っている語以外は原則に従う型である③が圧倒的に多いが、Tでは①と③のゆれのある語が目立つ。このうち、①となっているのは、原語アクセントと一致する語¹²⁾もあれば、使用者の意識の問題とも関わるが、外国語だという意識が強くはたらいて、原語(英語)に多い第1音節にアクセントを置く傾向のある語「アーケード(arcáde)①・シガレット(cigaréte)①」もある。原語アクセントと一致している①の語も偶然で、原語アクセントの第1音節の影響によるものかもしれない。このような例は特に東京アクセントの5拍語に目立っている。

K・O方言は一致してKとは異なる理由は原語アクセントの使用者の意識の問題や「ッ」にアクセントが置かれるか、置かれないかにあると言えよう。

4) T = O ≠ K(アクセントはT—K—Oの順)

アカデミー②③—コ③—テ②テ③

アナウンス③②—テ②—テ③コ③

インタビュー①—テ③—①テ③

バッテリー(人)①—☆コ②—①

♣オペレッタ・ピラミット③—コ④—コ③

[計33例]

語末の「一」や「ス」などアクセント核を前の拍にずらす要因を含む語が目立つ。②となっている例がこれに当る。バッテリー(人)のKでは「コ②」となっているが、これは京都方言の5拍語では非常にまれな型¹³⁾で、5拍語全体でも8例(カテゴリー・ボヘミアン・グット

12) エピソード(épisode)・コンパクト(cómpact)・スケジュール(schédule)・ヘルメット(hélmét)・マーケット(márket)などである。

13) T・K・Oで共通に表記されている5拍語290語中、京都方言では②が48例あるが、このうち「テ②」が40例、「コ②」は8例しか見られない。参考に5拍の大阪方言では②が52例あるが、このうち37語が「テ②」で15

バイ・エッセンス・バッテリー(人)・バッテリー(物)・マットレス・ミュージカル」しかない。このようにKの5拍語に「コ②」が少ないことについて中井(1988)では、京都方言では「コ②」が嫌われるということと原語の音調などに関係がある¹⁴⁾と指摘している。

5) T≠K≠O

カーニバル①③(①)ーコ③ーコ②	バッテリー(物)①①ーコ②ー①
プレミアム(premium)②①ーコ①ーコ③	メッセージ(message)①ーコ③ーコ②
エロチック③ーテ④ーテ②	[計5例]

T≠K≠Oは全部5例しかなく、「ッ」や語末の「ル」「ー」それから原語アクセントの影響でアクセントが全部、異なっている。

5.5 6拍語以上

総数229語中、一致するアクセントは167例、一致しない語は62例がある。この62語中、T=K≠Oは3例、T≠K=Oは50例、T=O≠Kは9例、T≠K≠Oは0例が見られた。6拍語以上の例では一致しない例を中心に検討してみる。

1) T=K≠O

アンチモニー④ーテ④ーコ③	ポリエチレン④③(③①)ーコ④ーコ③	
ルポルタージュ④ーコ④ーテ②?		[計3例]

「アンチモニー・ポリエチレン」のOでは語末の「ー」「ン」の影響で④が③になっていると考えられるが、「ルポルタージュ」の②は究明できない型である。

2) T≠K=O

アクセサリー①?③ーテ③ーテ③	
プライベート(private)②④ーテ④ーコ④	[9例]
♣クラリネット・ホームシック・リュックサック④ーコ⑤ーコ⑤	♣[41例]
	[計50例]

6拍語以上の一致しない語62例中、50例がこのパターンに入るが、このうち41語が、♣印の例のように京都・大阪方言では「ッ」にアクセントが置かれたため、東京アクセントと異なっているのである。

「アクセサリー」Tの①は不明だが、考えられるのは語末の「ー」の影響で6拍から5

語が「コ②」となっている。

14) 京都アクセントの話者にとって外国語としての英単語は、「低起式でモーラ音素の前のモーラに核がある」音調に近く発音したり聞こえたりするのである。

拍となった結果、原語の第1音節にアクセントを置く意識と関わって、5拍語に多い頭高型(①)発音したのではないかということである。「プライベート」Tの②は原語アクセントの影響によるものである。

4) T=O≠K(アクセントはT—K—Oの順)

オーケストラ③—コ⑤—コ③

オリンピック④—コ⑤—コ④

スチュワーデス③—★コ④—コ③

ミスプリント④—テ③—テ④

[計9例]

「オーケストラ」は「ス」に母音の無声化が起っているため、TとOではアクセントが1拍前にずれた型、③をとっているのに対してKでは1拍後ろにずれた型、⑤をとっていることがわかる。ここで注目したいのは「スチュワーデス」のKで特殊拍「—」にアクセント核を置いている点である。こういう例は5拍語の「ハーモニー」の大阪方言にも見られた。これは今回の調査の対象語には他に見られなかったが、拙稿(2001)の大阪方言では「パートナー・インターホン・ペーパメント」が、拙稿(2002)の京都方言では「オーライ・ピューリタン・スローモー」が見られた。このような現象は少なく、K・Oを合わせても全部8例しかない。

特殊拍「ン」にアクセントを置く例はここでは見られなかったが、拙稿(2001・2002)で「ブランコ」や「パンクチュアル」が見られた。「ブランコ」は京都方言で、「パンクチュアル」は大阪方言であられた。

6. おわりに

日本語における外来語のアクセントに方言差がある語は何か。また、方言の差があるなら、その理由はなんであろう。これらを明らかにするために、今回はまず、東京アクセント体系とはかなり異なっている京阪式アクセントの一つである京都・大阪アクセントを東京アクセントとの対応の観点から調査した。特に東京・京都・大阪アクセントが一致しない例を中心にその要因と原因を検討してみた。その結果、次のことが言えよう。

第1は、調査の対象語1445語中一致するアクセントは992例(68.7%)で、一致しないアクセントは453例(31.3%)が調査された。外来語のアクセントが方言差が比較的少ないのは、外来語アクセントには後ろから3拍目にアクセントがあるという大原則が存在することからである。京都・大阪方言の「ッ」にアクセントが置かれる傾向を除けば、外来語のアクセントの方言差はもっと縮まるだろう。

第2は、東京アクセントが京都・大阪アクセントと異なる例が一番多かったが、一致しない理由の一つは、東京アクセントは特殊拍にアクセントの高さの切れ目がこないのに対して

京都・大阪アクセントとも特殊拍、その中でも「ッ」にアクセントを置く傾向が非常に高いからである。

第3は「ッ」にアクセントが置かれる傾向は、大阪方言より京都方言のほうが強いことがわかった。

第4は、秋永(1998)で京阪式アクセントは“独立性の少ない音韻(特殊拍など)にアクセントの高さの切目がきても、アクセントの位置が変化しない”と述べているが、今回の調査の結果としては特殊拍の中でも特に「促音」にそのような傾向が強く、「引き音」や「撥音」の例は極めて少なかった。

第5は、一致しないもう一つの理由は原語アクセントの使用者の意識の問題と関わってくるが、東京アクセントに比べ、京都・大阪アクセントは原語アクセントの影響を受けた例が少なかった。

第6は、東京アクセントが平板型や平板化に進んでいる語が多いため、京都・大阪アクセントと一致しない例がかなり見られたことである。

最後に、残された課題は、特殊拍にアクセント核が置かれることについて外来語のほかには和語や漢語なども含めて調査することや今回は京阪式アクセントを東京アクセントとの対応の観点から検討してみたが、今後もう少し、多くの方言アクセントを調査して音韻的な条件をもっと厳密に究明することが必要であろう。

【参考文献】

<参考辞書>

石綿敏生(1990)『基本外来語辞典』東京堂出版, pp.1-1026

T.konishi (1980) 『English - Japanese Dictionary』Shogakukan, pp.1-2088

NHK編(1985,1998)『日本語アクセント辞典』日本放送出版協会,1985年版
pp.1-990, 1988年版 pp.1-1023

平山輝男編(1986)『全国アクセント辞典』東京堂出版, pp.1-950

松村 明編(1988)『大辞林』三省堂, pp.1-2616

吉原 保(1983)『東京語大阪語アクセント辞典』大阪タイムス

<参考論文・書籍>

- 上野善道(1985)「地方アクセントの研究のために」『新しい方言研究』至文堂,
pp.176-187
- 小野米一(1985)「共通語化と方言の将来」『新しい方言研究』至文堂
- 金水 敏(1999a)「大阪方言の特殊拍アクセントについて」『大阪・東京アクセント音声辞
典CD-ROMによる』音声文法研究会(編)『文法と音声Ⅱ』くろしお出
版, pp.73-199
- 柴田 武(1994)「外来語におけるアクセント核の位置」『現代語・方言の研究』明治書院
pp.418(1)-388(31)
- 杉藤美代子(1986b)「促音、長音、撥音にアクセントをおく発話」『国語学』147
pp.106(1)-92(15)
- _____ (1996a)『大阪・東京アクセント音声辞典』CD-ROM, 丸善
- _____ (1998)「マルチメディアの辞典」『日本語学』3号(アクセント研究の現在)
pp.71-80
- 中井幸比古(1988)「京都方言における外来語のアクセントについて」『言語学研究』第7号,
pp.130-152
- 馬瀬良雄・佐藤亮一(1985)『東京語アクセント資料』科研費資料集, pp.1-1028
- 最上勝也(1987)「平らになる外来語アクセント」『NHK放送研究と調査』p.40
- 李香蘭(1992)「外来語アクセントの原則にはずれる語の分析--音韻的な要因を中心に--」
『東北大学言語学論集第1号』pp.109-123
- _____ (1995)『日本語における外来語アクセントの研究』(博士論文, 東北大学)
- _____ (1996)「平板化する日本語のアクセント」『日本文化學報2輯』韓國日本文化學會,
pp.51-69
- _____ (1997)「日本語의 外来語 악센트에 있어서 原語(英語) 악센트의 영향」
『日本文化學報4輯』韓國日本文化學會, pp.55-72
- _____ (2001)「東京語と大阪語の外来語アクセントの比較」『日本語學研究第4輯』
韓國日本語學會, pp.182-194
- _____ (2002)「東京語と京都語の外来語アクセントの比較」『日本語文學第15輯』
韓國日本語文學會, pp.203-222

要 旨

日本語の外来語アクセントの地域方言の差を調べるため、京都・大阪アクセントを東京アクセントとの対応の観点から分析を行なった。特に東京・京都・大阪アクセントが一致しない例を中心にその要因と原因を検討してみたが、その結果は次のようである。

まず、調査の対象語1445語中一致するアクセントは992例(68.7%)で、一致しないアクセントは453例(31.3%)が調査された。外来語のアクセントが方言差が比較的少ないことがわかった。

一致しないパターンの中で、東京アクセントが京都・大阪アクセントと一致しない例が一番多く調査された。一致しない大きな理由は、東京アクセントは特殊拍にアクセントが来られないのに対して京都・大阪アクセントとも特殊拍、その中でも「ッ」にアクセントを置く傾向が非常に高いからである。「ッ」にアクセントが置かれる傾向は、大阪方言より京都方言のほうが強いことがわかった。特殊拍の中でも「ー」や「ン」にアクセントを置く例はあまり見られなかった。

一致しないもう一つの理由は原語アクセントの使用者の意識の問題と関わってくるが、東京アクセントに比べ、京都・大阪アクセントは原語アクセントの影響を受けた例が少なかったことである。それから、東京アクセントが平板化や平仮化に進んでいる語が多いため、京都・大阪アクセントと一致しない例がかなり見られたことである。

キーワード：京阪式アクセント、方言差、特殊拍、「ッ」にアクセント核を置く傾向、
平板化、原語アクセントの影響、使用者の意識の問題

투 고 : 2007.11.30
1차 심사 : 2007.12.08
2차 심사 : 2007.12.29

住 所 : (305-770) 대전시 유성구 지족동877 열매마을 아파트 510-1902
電 話 : 063-850-6524(학교) 042-471-2275(집) / 011-9816-6559
e-mail : ran96@wonkwang.ac.kr